

2014年
6月13日
金曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

渋沢栄一『論語と算盤』

今日の日本では道徳が混沌とした状況にある。何を信じるか、何に価値を置くかが定まりにくい。あえて言えば、最も普及している道徳観・価値観は、「良い就職」ないし「高い年収」だろう。私も含めて多くの人は、人生の前半期には、漠然とこれらをめざして競争し（受験競争・出世競争）、そして人生の後半期にはこれらによって人を評価しがちである。小学校から大学までの、ときには塾や予備校も含む、長きにわたる教育が、ひとえに「職のため」「金のため」だとすれば、それに役立たない知識をテストや宿題を通じて無理に学ばされることは、単なる苦行でしかない。「自分は何のため勉強してきたのだろう」という疑問を感じるのも当然である。

現代日本には、このような広い意味での「拝金主義」の過熱を制御できざるほどに強力な道徳観は、残念ながら大学の中にさえ僅かしか残存しないように思う。経済学部教員の一人として、私は自分の無力さを痛感する。リーマン・ショックのような資本主義の暴走を引き起こしたのもまた、道徳なき経済至上主義だった。けっして容易なことではないが、私は健全な市場経済の発展のために、道徳と経済の結びつきを回復しなければならぬと信じている。

「日本資本主義の父」と言われることもある。実際、明治以降のわが国の近代史を学べば、彼の名があらこちに登場することに気付くだろう。

わが国では武士道的価値観の影響もあり、金銭は卑しいものであるという考えが根強かった。しかしそれは偏った考えであり、金銭自体は悪でも善でもない。それが悪になるか善になるかは、その持ち主の行動次第である。ここで言う行動とは、①その貨幣をどんな方法で手に入れたか、②その貨幣を何に使うか、の2つであり、この2種類の行動の中にその人の貨幣的「人格」が如実に表れてくる。金銭を醜いものにしたたり美しいものにしたたりするのは、この①②によって顕示される人間の行動なのである。今なお金銭が卑しいものと見られているとすれば、それは

金銭所有者の行動が卑しいものと見られているからだ。

渋沢の『論語と算盤』は、道徳と富の両立のために、以上のような金銭所有者の責任を強調している。現代日本は世界屈指のGDPを誇っているが、その膨大な所得を生みだしたり消費したりする中で、一体どれほどの人々が憎みあい、苦しみ、そして「負け組」と呼ばれて蔑まれ、合法的に抑圧されてきたことだろう。わが国のGDPは数字の上では尊敬に値するが、前述の①②の観点から見ても尊敬に値するか否かは、はなはだ疑問であるように思う。経済を倫理的に尊敬しない者が、はたして経済学を尊敬できるのか。倫理的には醜い学問でも、「職のため」「金のため」には役立つので我慢して学ぼうという姿勢では、あまりにも悲しい。